# 図像構成からみた高句麗前期の壁画古墳の 特性と被葬者の出自の研究

(課題番号:17520532)

平成17年度~平成19年度科学研究費補助金 基盤研究(C)研究成果報告書

2007年6月

研究代表者 南 秀雄 (財団法人大阪市文化財協会文化財研究部)

## 例 言

本書は文部科学研究費補助金「図像構成からみた高句麗前期の壁画古墳の特性と被葬者の出自の研究」(課題番号:17520532)を受けて実施した研究の報告書である。研究組織、交付決定額は以下の通りである。

研究代表者:南 秀雄(財団法人 大阪市文化協会文化財研究部)

交付決定額:平成17年度

1.400.000円

平成18年度

123,833円

平成19年度(繰越し) 576,167円

次に、研究遂行のために行った主な調査は以下の通りである。

<壁画模写資料調查>

• 東京大学工学部建築学科

平成18年2月21日~2月22日

双楹塚、江西大墓、江西中墓の壁画模写の調査

• 朝鮮大学校付属博物館

平成18年6月3日~6月4日

1985年に日本で開催された高句麗文化展の際に制作された壁画模写などを中心に調査

• 韓国国立中央博物館

平成19年6月18日~6月21日

**爺神塚、双楹塚、天王地神塚、鎧馬塚、狩猟塚(梅山里四神塚)の壁画模写の調査** 

この他に学会出張や中国山西省考古研究所副所長の馬昇氏を招いての北朝壁画墓の研究会など を行った。

また、これらの成果を一般市民へ還元するため、大阪歴史博物館の金曜歴史講座での 2 回の講演会(平成17年 6 月と19年 6 月)や『朝鮮新報』への寄稿(平成18年 7 月26日付)を行った。

## 目 次

1.	研究の目的	1
2.	各古墳の図像構成の分析	2
	(1) 龕神塚	2
	(2) 双楹塚 ······	10
	(3)狩猟塚(梅山里四神塚)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	13
	(4) 鎧馬塚 ···································	
	(5) 徳興里古墳 ······	
	(6) 天王地神塚 ······	28
	(7) 安岳1号墳 ······	31
	(8) 舞踊塚	33
	(9)三室塚 ······	36

## 1. 研究の目的

2004年、壁画古墳を主とする北朝鮮・中国の高句麗遺跡が世界文化遺産に登録された。それと同じ頃、中国側の東北地域の歴史の再評価の中、高句麗は中国史か、韓国・朝鮮の歴史か、韓国民を巻込んで韓国と中国の対立が鮮明になった。これに答えるひとつの方法は、発掘された生活用具等の物質文化の異同であり、壁画古墳は格好の比較資料である。またこの問題は高句麗壁画古墳の歴史的評価に関わる。

模倣を超えるのか否かは、どれだけ周到な設計に則して壁画や石室が構成されたのか、高句麗独自の法則性が見出せるのかによる。本研究では、高句麗前半期の壁画古墳を対象に、中国の後漢から魏晋南北朝期の壁画古墳の影響から、どれほど独自の設計原理に則って高句麗の壁画古墳が作られたのかを明らかにしたい。

本研究の目的は、個別の図像や石室だけの比較ではなく、図像の配置や向きなどの詳細な検討から壁画の構成を明らかにし、石室構造と組み合わせて、墓室の空間設計を総体的に解明することにある。私はかつて、いくつかの高句麗壁画古墳の天井部を中心に、中国の壁画資料や文献史・美術史の成果を利用し、壁画の設計の解明を試みた。そこには細かい配慮に基づいた設計が存在し、高句麗独自の特徴も看取できた。同様の手法を他の古墳にも当てはめ、天井に留まらず壁部の壁画も含めて分析する。これによって、石室構造が多様で壁画内容が豊富な高句麗前半期の壁画古墳の壁画の設計を、特定のモチーフの場所の傾向を捉えてきた従来の研究より一歩進めて明らかにできると考える。その結果、墓室全体に対して緻密に計算された設計に、単なる模倣では生まれない高句麗の独自性を見出せると予想される。

また壁画古墳の壁画の設計は、被葬者の信仰と世界観、経歴、社会的地位などを如何に表現するかに関わる。そのため、被葬者の出自や文化的背景の解明と関連し、複合的な民族と文化をもつ高句麗の国家形成過程の研究に寄与できる。

以上の分析を行うために、まず壁画の正確な展開図を作成することから始めた。展開図の作成には図像の詳細な観察が必要であるが、それには第二次世界大戦前に日本人学者らによって制作された壁画の模写が役に立つ。近年、東京大学工学部建築学科や韓国国立中央博物館などにおいて、模写が研究・整理されており、壁画の劣化が進んでいる現状ではそれらが極めて有効な資料となっている。本研究では、残存状態の良い高句麗の壁画古墳を対象に、これまで北朝鮮や中国集安での現地調査の記録類、公表されている報告書・写真類に加え、模写資料を実地調査することにより、展開図を作成しつつ詳細な観察を進め、「何がどのような構成で描かれているか」という基本的な分析を深化させることをまず目指した。これらの図面と記述・分析は、今後の様々な他の研究の基礎資料として役に立つと考える。

## 2. 各古墳の図像構成の分析

## (1) 龕神塚(北朝鮮・南浦市臥牛区域新寧里)

職神塚は前室と後室(2.7m四方)からなり、天井は穹窿式で、後室はその上に2段の隅三角持送り天井をのせる。前室の東と西には徹があり、その中の肖像画が神像のように見えることから離神塚の名がある。ここでは朝鮮古蹟図譜をはじめとする図・写真に加え、韓国国立中央博物館所蔵の模写資料(註1)で前室の壁画を描き起こした。前室以外の壁画では、後室の北壁に帳房内の主人らの肖像、西壁に狩猟の絵があり、羨道に行列図が残る。

図1は前室全体の展開図である。帳房や柱・梁・斗栱、梁の上の三角形火炎文は図1では省略している。東壁(入口を入って右)では天井部の壁画が劣化し、記録がない。また、南壁 (入口側)も天井部と壁の上半が劣化して記録がない。

まず前室全体を見渡すと、壁画の中心は東西の龕にある肖像画である。肖像画の両サイド、つまり龕の側壁の細長い部分には、龕中に描かれた人物を護るため刀剣を持った人物が個々に 4人ある。龕の外には龕中の人物に供侍する女性たちが描かれる。北壁にある侍者もその続きで、西半は西龕の、東半は東龕の人物に仕えている。南壁の西下部にある車とそれを警護する兵士は、羨道の行列図へと続く一連のモチーフである。この車は墓の被葬者が乗るもので、西 龕中の人物が出行するためにここに用意されたと考えられる。南壁の東下部にある乗馬の人物 たちは、太鼓をはじめとする鳴り物を持っており、楽隊の一部と見られる。東龕中の人物を供 応するためにこの場所に描かれたと考えられる。

次に、方向ごとに壁画を見ていきたい。

まず、もっとも注意したいのは西壁の壁画である。これまであまり注意されてきていないが、 それは現状の壁画が退色し、この部位の記録が十分に報告されていなかったからで、韓国国立 中央博物館の模写資料の整理が進み、より詳細な分析が可能になった。

西壁(図 2 )の龕の奥壁には、正面を向き牀の上に座る大きな人物がある(図 3 、写真 1 )。 この人物の頭部は一部しか残っていない。牀の後ろには左側に手に何かを持つ侍者、右側に払 子を持つ侍者があり、よくある構図である。また、牀の下には大きな蓮華文が 3 分の 1 程度描 かれている。

この人物の最大の特徴は、手の組み方にある。左手は立て気味にして手の平を外に向け、右手は小指を立て他の指は曲げているように見える。すなわち仏教の印を結んでいる。高句麗古墳の壁画中、このような肖像の例は他に知られていないと思われる。頭部は大部分剥落しているが、服装などに通常と異なる点は見出せない。全体の配置で見た、主人が乗る車や周囲の護衛兵士と侍者との関係などから、この絵は仏像などではなく、墓の主人を表していると考えられる。本来、前室西側はもっとも重要な図像が描かれる場所で、安岳3号墳では墓主夫婦の肖像が、徳興里古墳では被葬者男性の肖像がある。この場合も描かれているのは被葬者の男性で、彼が仏教に帰依しているようすを表現していると考えられる。印の形態は仏教の宗派の手がかりになるかもしれない。

さらに興味深いのは、西龕の上の天井部に描かれた絵である(図2・4、写真2)。この絵は西壁の梁上の三角形火炎文の上に描かれており、周りには雲文がある。ちょうど西龕の真上に位置する、柱で支えられた台の上に正面向きに座る人物がある。その左に2人、右に1人、中央の人物に仕える侍女らしき女性がある。またこの台の右下には鳥に乗って飛ぶ人物がいる。

台の下には「Z」字状のものが、柱の前と後ろを通ってジグザグに続いているように表現されている。この中には渦文があり、台も柱も同様に渦文で満たされている。この「Z」字状のものの途中やその下には山が描かれている。

これは何を表現しているのであろうか。

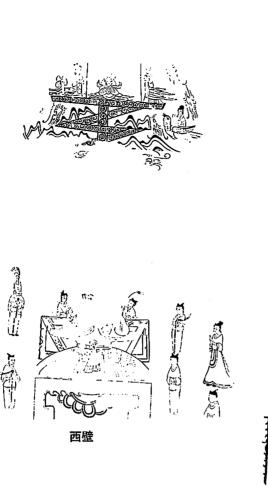
まず、一連の絵は地上の世界ではなく、山よりもさらに高い天空かそれに近い世界を表している。山岳は地上と天空の境にあってそれらを隔てる役割があり、高句麗古墳では徳興里古墳の前室東半を巡る山岳の絵にそれがよく表れており、中国の南北朝期では甘粛省酒泉の丁家閘5号墓などに良い例がある(註2)。韓国国立中央博物館編『高句麗古墳壁画-国立中央博物館所蔵模写図-』の解説では、台上の中央に座る人物を西王母としている。この人物の胸の辺りから、両側にたなびく布状のものが出ている。後述する狩猟塚(梅山里四神塚)の奥壁にある「仙覚」の文字の下にある墓主と考えられる男性たちの胸にも同様のものが付いている。これは生身の人間でない、特別な印しと思われる。西に位置すること、山よりもさらに高い所に居ること、胸の突起状のものなどから、この図像は西王母の可能性がまず想定できると思う。つまり、台上の世界は仙界を表していると考えられる。また、台へ続く「Z」字状のものは、そこへ至る通路・階段を表したものであろう。その道は山をいくつも越え、さらに柱の前と後ろをジグザクに通すことで螺旋状に続くかの如く立体的に表現されている。柱・台・通路が渦文で埋められているのも意味があると思われる。林聖望は壁画に描かれた天の川を分析し、北燕の馮素弗墓と固原漆棺の天の川に多くの丸い渦巻きが描かれているのを、水の表現というより「精気」の表現と推測した(註3)。この爺神塚の壁画にも共通する点があるように思う。

また、台上の4人の人物の服には長い布のようなものがいくつか付いてたなびいている。これも壁部にいる普通の人物と違う点である。例えば、一番右側の女性は、エプロンのような前垂れを付けている点に特徴があり、同じ服装の女性は、その下の西壁の壁部にあって龕中の被葬者に仕えている。両者の違いは、この服に付いた長くたなびく布状のものだけで、おそらく、天上界、仙界にあるものの印しのひとつと思う。

以上の前室西壁の壁画についてまとめると、西徹の人物は仏教に帰依していた被葬者その人を表し、天井の壁画は西王母や仙人のいる仙界を表している。仙界へは通路を通って登ることができ、全体は仙界を構造的に表現していると考えられる。被葬者は仏教に帰依しつつ、死後は極楽浄土ではなく仙界に生きることを望んでいたのであろうか。

次に前室東壁の壁画を見たい(図 5 、写真 3 )。東龕には西龕と対になる人物が描かれ、龕 、側壁の護衛の兵士や周囲の侍女など、基本的には西側とかわらない。後ろには左側に払子を持つ侍者、右側に食べ物を持つ侍者が仕える。西龕の人物と異なり、手は普通に袖の中に収めて拱手している。普通には西の男性被葬者に対する東の女性被葬者であるが、女性でこのような被りものを付けるのか気になる点である。

前室北壁の壁画は、図1で見るように後室へ続く通路を挟んだ壁部分の左は西壁と、右側は 東壁と一連の図像である(図6)。通路の上の天井部には2羽の鳥を向かい合わせに大きく描 く(写真4)。この鳥は鳳凰であろうか。間には西龕の牀の下にあったのと同様の3分の1程 度の大きな蓮華文が描かれる。2羽の鳥の間には幼い雛のような鳥が6羽並んで描かれている のが注意される。



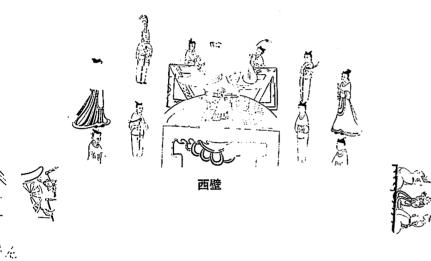


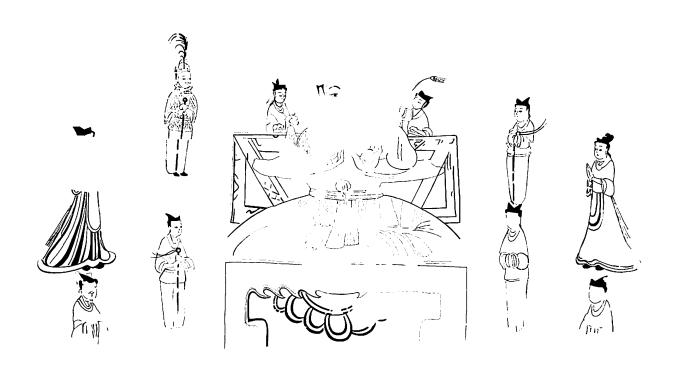




図1 **ณ神**塚前室壁画展開図







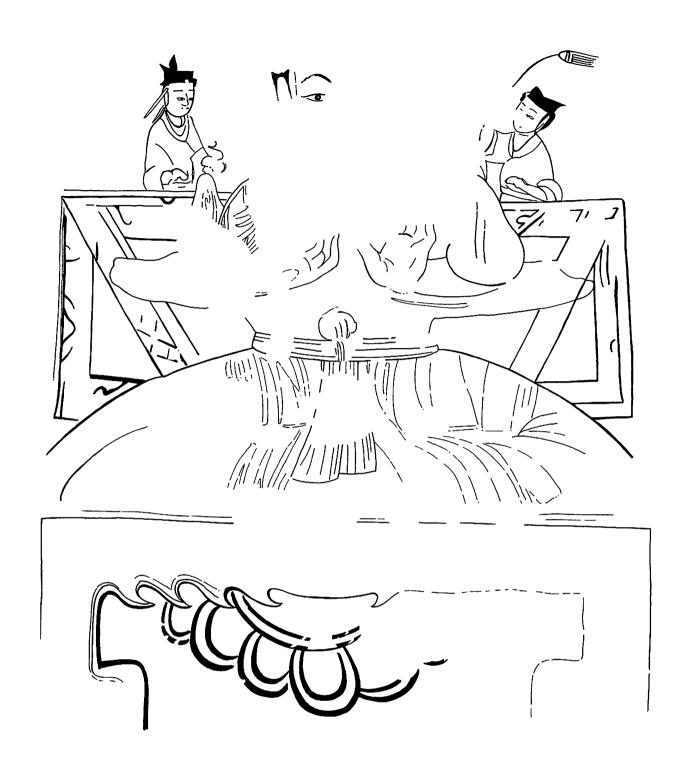
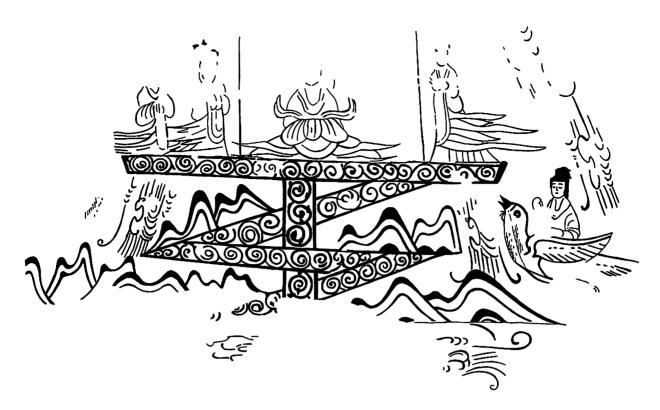


図3 龍神塚前室西龕奥壁壁画







右圍

通路

左壁



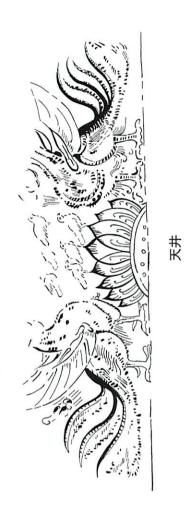




写真1 龕神塚前室西龕奥壁



写真 2 龕神塚前室西壁天井



写真 3 龕神塚前室東龕奥壁



## (2) 双楹塚(北朝鮮・南浦市龍興郡龍興邑)

双楹塚の石室は、正方形の前室と後室(3.0m四方)からなり、通路には龍が描かれた精巧な八角形の石柱がある。天井は3段の平行持送りの上に2段の三角持送りがある。壁画は、まず四隅の柱と斗栱で梁を支え、その上に一種の蟇股を描き、建物内部に模している。前室の壁画は壁部に青龍と白虎、入口を護る南壁両側に人物図がある。前室の壁画の主題は青龍と白虎の四神である。

後室の壁画は、北壁に墓主夫婦像と玄武があり、東壁には僧侶を含む 9 人の男女立像がある。また西壁にも後室と似た帳房があるが、内部の人物などはよくわからない。南壁の通路の上の梁上には向かい合わせの鳥があり、朱雀と考えられている。羨道には守門将・牛車・騎馬・雑技人物などがある。本書で取り上げる九つの古墳では狩猟塚と並んでもっとも新しく、主に四神図のみで構成される壁画古墳へ移行する時期のものである。

ここで分析したいのは後室の壁画である。

図7は後室の北壁壁部の壁画を描き起こしたものである。双楹塚の壁画の模写は、東京大学 工学部建築科と韓国国立中央博物館にそれぞれ所蔵されている。図7の基にしたのは東大所蔵 の模写で、分割撮影したものを合成して作図したため部分的に歪みが出ているかもしれない。 この墓主夫婦図の左には小さな玄武の図がある。また逆に、右の方には台に載った黒い小さな 合子と、足の付いた長方形のテーブル状のものがあるが、それらは省略した。また、墓主夫婦 図のうち、帳房を支える太い柱と、黒と黄の平行四辺形から成る土台は部分的にしか描き起こ していない。

さて、具体的に後室の墓主夫婦図を見ていく。墓主夫婦を囲む帳房や建物は、高句麗壁画古 墳中でもっとも複雑なものである。外側には太い柱で支えられた、モンゴルのゲルのように布 で屋根を張った帳房がある。屋根の下は二重に梁があり、「人」字形の蟇股が梁の間にある点 は、石室全体に描かれた建築構造と基本的に同じである。太い柱の柱頭には怪獣の顔がある。 また屋根の頂部には鳳凰のような鳥がいる。幕は縞模様に彩られているが、水色の水玉模様が 散っているのが特徴である。

この帳房の下に2階建ての建物がある。二重の梁と「人」字形の蟇股は帳房と同じである。 棟の端には鴟尾のようなものが立体的に描かれ、また2階の棟の中央と1階の棟上に三角形火 炎文がある。左の1階部分では、黒い環状の取っ手が付いた扉が半開きになっており、左には 外へ出る階段がある。階段は主人らが座る正面にもある。下には黒と黄の平行四辺形から成る 帯が水平に描かれている。これは基壇のようにも見えるが、壁画の画面を分割する区画帯にこ のような表現がある(高山里1号墳)。

主人夫婦は上記の建物の下に並んで牀に座っている。右が被葬者の男性、左が女性で、2人の前には黒い靴が1足ある。墓主夫婦に仕える侍者は左外に女性が2人立ち、右外に男性が2人いる。右側の上の男性は被りものや高い鼻と顎鬚・口髭から高句麗人ではなく、高句麗古墳の壁画で西域人とされる特徴がある。その下にあるのは主人が乗る輿であろう。横に立っているのは輿の担ぎ手か先導者と思われる。それぞれ別の牀に座る夫婦は赤い縞模様の服装などが良く似ている。女性は手の部分がよくわからないが、男性は、親指の先を合わせて手を組んでおり、親指の爪まで描かれていることが見て取れる。

興味深いのは、左側にいる女性の太ももと膝のあたりから出ている、リボン状に翻って伸びるものである。左右にそれぞれ2本ある。このようなリボン状に伸びて翻るものは、先述の龕

神塚前室西天井の西王母の可能性のある人物で見られた。おそらく生身の人間にはこのようなものは付いておらず、双楹塚後室奥壁の肖像も同様であろう。

このモチーフの右側、つまり後室の東壁には9人の人物が列をつくって奥壁側へ歩いていく 姿が描かれている。この絵は朝鮮古蹟図譜の報告などに明瞭に掲載されている(註 4 )。先頭 から 4 番目で、もっとも大きく描かれている女性が墓の被葬者と考えられる。また次に大きく描かれた 2 番目の人物は、短い髪の頭、服装、手に錫杖を持つことなどから僧侶と言われている。この女主人は仏教に帰依していることを表しており、彼女が向かうのは帳房の下で夫と座す奥壁である。そこでは既に現世の身ではなく、生前の望みどおりに仙界に近い存在と化すことができているのであろう。その証拠が太ももの辺りから翻って伸びるリボン状のものであろう。推測を広げると、同じ後室の西壁にも帳房があるが、ここに描かれていたであろう肖像はより現世に近い存在で、奥の肖像は既にこの世の存在ではないのではなかろうか。元来、肖像は前室西壁や西の龕に描かれ、それが徳興里古墳のように前室西側と同時に、後室奥壁にも描かれようになった。二つの位置にある肖像は、それぞれに意味が異なっていたことが想定される。

最後に細かい点ではあるが、双楹塚の模写の資料調査の過程で気付いた点を記しておきたい。 写真5は前室の天井持送りの模写で、雲の中に西に3羽、東に3羽、南に2羽、北に3羽の鳥が左向きで描かれている(写真は上より西・東・南・北の1羽分のみの部分)。これらの鳥は、西が静止した姿、東が地を駆ける姿、南がまさに飛び立とうとする姿、北が空中を飛んでいる姿に描き分けられている。細かく図像が描き分けられ、細心の注意で構成されている高句麗古墳の壁画の1例である。

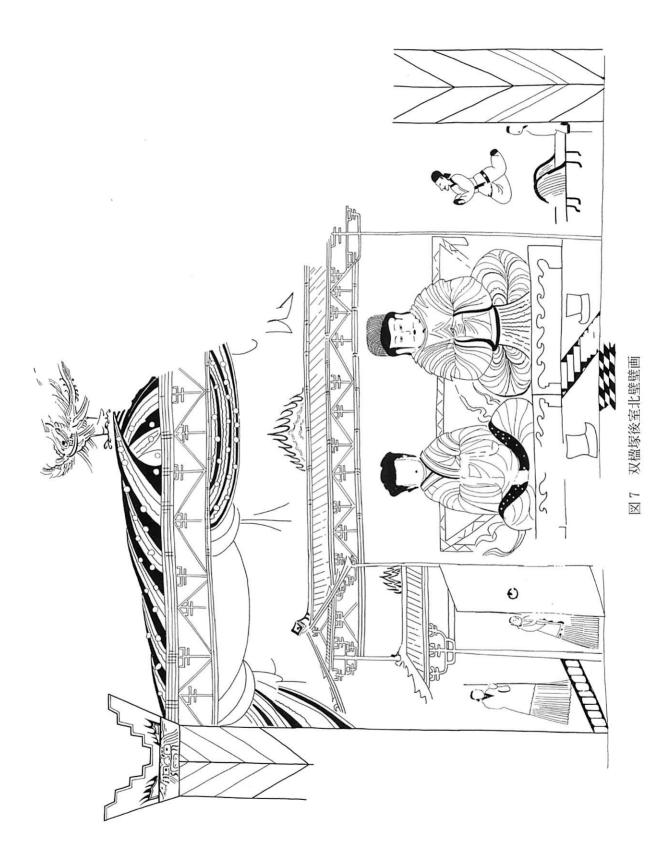




写真 5 双楹塚前室天井持送りの鳥 (上より西・東・南・北の持送りの1羽分のみの部分)

## (3)狩猟塚(梅山里四神塚 北朝鮮·南浦市臥牛区域火島里)

狩猟塚は、ほぼ正方形(3.5m×3.3m)の石室を有する単室墓で、羨道は東に偏って付き、 天井は穹窿・平行・三角持送りである。壁部に四神が大きく描かれているが、まだ人物図と共 存している段階である。北壁には墓主の肖像があり、左に双玄武がある。反対の右には引かれ た馬がたたずむ。東壁には青龍と騎馬人物、西壁には白虎と狩猟、南には相対する朱雀がある。 持送り部には太陽と月、簡略な雲文と唐草文が描かれる。狩猟塚壁画の全体の構成を見ると、 北壁以外では四神図が大きく描かれ、これが中心になっており、北壁のみは墓主の肖像が中心 である。

の右端の女性は単独の牀に座しているが、残り2人は同じ牀の上にいる。男性と左2人の女性 の前には黒い靴が揃えて置いてある点も双楹塚と共通する。

ここでも、4人の服の胸の部分からリボン状の羽のようなものが左右に翻っている。男性の場合には太ももの辺りからも同様のリボン状のものが二つ伸びている。この部位から伸びる例は双楹塚後室北壁の女性被葬者の肖像でも見られた。同様に太もも(腰)の辺りから伸びるリボン状のものは、左端の女性の右腰の辺りでも観察できる。従来から注目されているのは、男性の墓主の頭の左上にある「仙覚」の墨書である。仙覚とは、「仙人になることを覚る、仙界に行けるようになる」ということであろうか。リボン状の羽のようなものが付いている意味は、これまで記してきた通りで、この他に服や髪形、姿勢などにおいて、この墓主像にとくに変わった点は見られない。

次に東壁には入口を向く青龍と共に、奥側、つまり東壁の北端に騎馬人物がある(写真7)。この騎馬人物は奥壁側へ向かっており、高句麗古墳の壁画でこのような騎馬人物が単独でぽつんと描かれた例はない。この騎馬人物の先には、人を乗せていない馬が引かれてたたずんでいる。この騎馬人物は男性墓主その人で、壁画は時間の流れも表しているのではないかと思われる。つまり、墓主は馬に乗って北壁側へ向かい、北壁で馬を降りて牀に座る。馬に乗っている時は、リボン状の羽のようなものは付いていない。まだ死した後、現世に近い存在だからであろうか。北壁の牀に座った姿にはリボン状の羽のようなものが付くのは、望み通りに仙界に近い存在になったからであろう。騎馬人物を良く見ると、彼は裸足で靴を穿いていない。これは馬に乗るには不自然で、多くの騎馬人物の壁画では見られないことである。仙界に至る過程と関係して何か意味のあることと思われる。写真8は西壁の玄武の上にある狩猟の場面である。これは狩人が1人と動物が2頭のみで、山なども描かれない、孤立した小さな狩猟図である。狩人が裸足であることは上記の事柄と関係するかもしれない。



写真 6 狩猟塚北壁の墓主像



写真7 狩猟塚東壁の騎馬人物



写真8 狩猟塚西壁にある狩猟の騎馬人物

## (4) 鎧馬塚(北朝鮮・ピョンヤン特別市三石区域魯山洞)

次に断片的な壁画の観察であるが、鎧馬塚を取り上げる。

鎧馬塚は、四神図が主体となった古墳でまだ人物図なども描かれる段階のものである。石室は両袖式の単室で、天井は2段の平行持送りの後、2段の三角持送りをのせる。北壁の大きな双玄武をはじめ、青龍・白虎・朱雀が描かれる。東壁の持送り1段目には奥へ向かう徒歩の行列があり、華やかに飾られた鎧馬が描かれている(写真9)。鎧馬は人を乗せないまま引かれており、その前には「冢王着鎧馬之像」の墨書がある。

下から1段目の三角持送りの4面には飛天(あるいは仙人)がそれぞれ2体ずつ描かれている(写真10)。飛天は正座するように座っており、手を胸の前で合わせている。羽のように長くたなびくものを4本付けている服に飛天の特徴が表れている。また、頭には兎の耳のように長い二つの突起がある被りものを付けている。この飛天は、それぞれの持送りで赤い服を着たものと白い服を着たものが組合せになっており、赤と白を対にして描き分けた細心の構成が見

## て取れる。



写真 9 鎧馬塚東持送りの鎧馬



写真10 鎧馬塚三角持送りの飛天

## (5) 德興里古墳(北朝鮮·黄海南道南浦市江西区域徳興里)

徳興里古墳は前室と後室から成る壁画古墳であるが、図像数も多く、各図像に名称と属性などを示した榜題が付けられていることから、これと対比して他の古墳壁画を見ていくことができる。また、墓誌から408年の築造であることが知られる。

徳興里古墳では、被葬者は「釋加文佛弟子」であったと墓誌に記している。全体の壁画配置は表1のようになっており、ここでは前室天井壁画を分析の対象とする。前室では、壁に墓主の肖像と彼に拝謁する太守や官吏・行列などの場面、天井に鬼神・仙人・説話の一場面・狩猟・日月星などと空白を埋めて雲文がある(図8)。

前室天井壁画の図像は、太陽・月などの天体以外では2群のまとまりに分かれる。その端的な違いは榜題の有無である。榜題を有する図像群(A群)は、各図像の向きから南(6)→西(5)→北(9)→東(3)と回転しながら続いており、全部で23個から成る(北壁東端の下部のみ残存する図像には本来榜題が付いていた可能性が高いのでこれも含む)。A群の図像に共通するのは、いずれも現世の存在でないと考えられる点である。一方、榜題を有さない図像群(B群)は北壁東端・東壁・南壁東半にある狩猟の場面を構成している。山岳上の矢を射かける8人の騎乗の人物と9匹の動物から成り、その姿形は現世の存在とかわらない。東壁ではA群とB群の図像が上下に重なって入り組んでいるが、A群の図像が左向きで並んでいるのに対し(例外1体の理由は後述する)、B群の図像では左向きが大勢を占めつつも右向きも混じる点や、A群の獣や鳥の身体を有する鬼神のほとんどが胸から体部にかけて縞状の斑点があるのに対し、B群の動物にはそれらがないという描法の違いでも区別することができる。東壁では榜題を有する3体以外は狩猟図に伴う図像と考えられる。

山岳と狩りの場面は、A群とした鬼神類の図像と壁に描かれた出行の場面との間に位置する。 狩猟図が天井に描かれたことがはっきりわかる例は高句麗では徳興里古墳以外にないが、この ような位置関係は西へ離れた甘粛省の古墳や石窟の壁画と対比してみることができる。西魏 (535~556) とされる敦煌莫高窟の249窟や(註5)、4世紀末から5世紀中頃とされる酒泉丁 家閘5号墓では(註6)、山岳と狩猟の場面や、狩猟は伴わない山岳の図が壁と天井の境を一 周している。それを境に上は鬼神類や仏などの非現実的存在や、鳥などの空や山にいる動物で

次: 心八工口员王自己已 是次													
壁面	墓室段	羨 道		前		室	通	路		玄		室	
東	上下	守門将怪物、 蓮花、人物		行列(中央部分)				人公外出 馬	南側	七宝行事 七宝行事	北側	<b>蓮 花</b> . ×	
西	上下	守門将怪物、 樹木、人物		6 郡太守 7 郡太守				人公外出 馬	南側	馬射戲人物、馬	北側	建 物 ×	
南	上下	×	東側	行列 (前部)	西側	幕府官吏幕府官吏		×	東側	連 花 ×	東側	蓮花、厩 蓮花、牛舎	
北	上下	×	東側	行列 (後部)	西側	政事をみる 主 人 公		×	主人公室内生活				
天 井	穹 篠 部 持送り部	×	-	特猟、伝説および信仰、日、月、星、雲文 連花文、 火炎文、 花文				×	梁、二重斗栱、割束 雲文、火炎文、蓮花文				
その他			各	壁に柱、	斗枝	<b>共、梁</b>			各壁に柱、斗栱、梁				

表 1 徳興里古墳壁画配置一覧表

社会科学院・朝鮮画報社『徳興里高句麗壁画古培』(講談社)

占められ、天井に描かれた人間は、狩人を除けば山中の修行僧や伝説化された殷の始祖湯王などの特殊な存在のみである。山岳と狩猟図は、天井と壁の間にあって天空や非日常的世界と通常の人間の世界を分ける境界としての役割があったと考えられる。半周で終るとはいえ、徳興里古墳の山岳と狩りの画像にも類似した性格が窺える。

前室天井壁画の主体を成すのは、鬼神や仙人などからなるA群の図像である。東壁南半から南壁東半の空白部から、南壁の牽牛像がそれらの先頭の位置になる。まず南壁(図 9)には牽牛・猩猩・仙人持蓮・吉利・富貴と、榜題の文字は剥落しているが、牽牛と組み合う織女の全部で 6 個(組)の図像がある。牽牛は牛を引き、織女には黒い犬が伴い、間には天の川があって別離の瞬間を表現している。牽牛と織女は衣服や冠帽・髪形とも普通の人間とかわらず、ただ、牽牛が小さな雲に乗っている点に違いがある。牽牛・織女は南壁の中央に位置し、天の川は左上隅から右下隅を結んで壁を二分するように横断しており、南壁では中心的な図像となっている。

高句麗壁画のなかで織女図とされるものはもう1例ある。それは南浦市大安区域大安里1号墳で、後室南壁の東側上部に建物内で機を織っている女性が描かれている。大安里1号墳は天王地神塚と石室の構造が極似しており、石室構造からみると徳興里古墳に近い時期を推定できる。大安里1号墳では後室の壁画は上下に2分され、下部の四壁には四神図がある。前室へ至る通路入口を挟んで、機織りの女性と反対の南壁西側は壁画が剥落しており、そこに牽牛像があったのかはわからない。後室の他の部位の壁画は、北壁上部が主人夫婦のいる殿閣図、西壁上部が主人に拝謁する臣下たちと月である。部分的に残っている東壁上部は太陽と厩をはじめとした建物があり、厨房などの家政的な施設が描かれた場所と推定される。つまり、北・西・東の壁上部は日常生活の各場面で、南の機織りの図も東壁と連続して日常的な労働の一場面を表現していた可能性もある。しかし、高句麗では日常生活を表した場面での機織りの図像は他に例がなく、同じ高さの壁上部には太陽・月もあること、徳興里古墳と同じ南に位置することなど、織女の可能性も排除できない。

高句麗以外の牽牛・織女図をみると、まず山東省肥城県の孝堂山祠堂(註7 永建4年(129)以前に建築)を挙げることができる(図10)。祠堂中軸に南北に架けわたされた石梁の下面に織女・太陽・月・星座・鳥が彫られており、その配置は南に織女・太陽・南斗六星・鳥、空白部をおいて北に月・北斗七星となる。月の横に一直線上に並んだ3個の星に対して小南一郎(註8)や夏仰(註9)は、織女とその頭部にある女宿(織女星)と対置して置かれた牛宿、つまり牽牛星(河鼓)とする。他に星座とともに牽牛・織女・白虎・月がある例や、白虎と青龍の図像と関連して牽牛・織女がある例がある。注目されるのは、牽牛・織女が青龍・白虎・太陽・月などの方位に関わるような重要な図像とともに登場している点と、孝堂山祠堂では建物中軸の目立つ位置にあることである。徳興里古墳で南壁の中心的画像として描かれ、大安里1号墳で機織りの女性が南壁の朱雀上にある点に共通点が窺える。

次に、牽牛・織女の下には人頭獣身の猩猩がある。猩猩は猿の一種で、人語を解すという想像上の生き物である。この図像が壁画に表わされた理由については、類似の図像とともに後に推測を述べたい。織女の上部にある仙人から西壁(図11)北端の萬歳像までの八つの図像は、仙人・玉女と吉祥的な意味を有する鬼神が並んでおり、榜題によると、仙人持蓮・吉利・富貴(以上南壁)・仙人持幢・玉女持幡・玉女持案・千秋・萬歳(以上西壁)となっている。先にある仙人は両手に蓮を持ち、三山冠のような三つに分かれた被りものを付ける。また衣服の裾は

羽のように二つに割れている。西壁の仙人は左手に幡、右手に幢を持つ。被りものの形は似ており、衣服の裾の形態も同じである。仙人の二つに割れた裾は舞踊塚などと共通し、高句麗壁画において仙人を示す特徴の一つとみることができ、被りものや旌旗類もその指標として指摘できる。玉女では、ひとりが左手に幡、右手に食べ物を盛った器を持ち、ひとりが食物を盛った案を両手で持つ。玉女の名が付された図像は、後漢後半から魏晋代の画像鏡で西王母や東王公の傍らで仕える侍女として表わされた例があり、また東晋太元11~19年(386~394)の間の雲南省昭通後海子の壁画墓(霍承嗣墓)では、青龍に食べ物の草を与えている女性がある(註10)。徳興里古墳の2人の玉女が食べ物を捧げているのは、天上で侍従するという役目のためであろう。

残りの吉祥的な意味を有する四つの図像はいずれも鳥である。南壁の吉利と富貴はその名称から対のもので、頭部は獣形であるが、足は獣と鳥に描き分ける。同形の対の図像での足の描き分けは、西壁の千秋・萬歳でも見ることができる。両者とも人頭鳥身で、仙人と同じ被りものを付け、千秋は獣の足、萬歳は鳥の足であることだけが異なる。千秋・萬歳とは、『抱朴子』内篇巻三で長寿のものを列挙するなかで、「千秋の鳥、萬歳の禽は、皆人面にして鳥身、壽命もまた其の名の如し」(千秋之鳥、萬歳之禽、皆人面鳥身、壽亦如其名)と言われるもので、中国の前漢から初唐期の墓室装飾や副葬陶塑にある、人頭鳥身あるいは獣頭鳥身の図像のあるものが千秋・萬歳に当たることが明らかにされている(註11)。ここで千秋が右向きに描かれたのは、以下の例から推して萬歳との向い合わせを意図したためと考えられる。まず、河南省部県学庄村にある東晋から梁代の画像磚墓では、1枚の磚のなかに人頭鳥身像と獣頭鳥身像が対面し、それぞれに千秋と萬歳の文字が伴う(註12)。この他にも中国の魏晋南北朝期の塼や墓室で対面された例は多い。千秋はA群とした23個の図像中唯一の右向きであるが、あえて逆向きにしたところにA群の図像群の配置に厳密な方向性があったことがわかる。

次の北壁(図12)は、上段の三つの図像と下段の六つの図像に分けることができる。上段の図像の榜題は、順に「天雀之像」・「地軸一身両頭」・「天馬之像」となる。中央の地軸を挟んで鳥と馬の身体を有する相似した性格の存在が対称的にある。天雀は頭と尾の部分に羽状のものがあり、そこに孔雀の眼状斑のような斑点が認められる。天馬は垂直に上がった尾が大きく風にたなびき、たてがみも風に吹かれて鋸歯状になっており、翼はないようである。これらの点は、慶州天馬塚出土の障泥の絵や酒泉丁家閘5号墓壁画で伊藤秋男が指摘した天馬の形態的特徴と共通しており(註13)、狩猟図中の馬との明瞭な違いを見せている。また北壁東端、山岳上にある頭部が剥落した馬形の図像でも、天馬と同形態の尾の一部が残存する。これは狩猟図の馬のように装具がなく、図像の向きも外れることから現世の存在でないA群の仲間で、榜題が剥落したものであろう。

中央の地軸は北斗七星の下にあり、獣の身体の両側に首が伸びてそれぞれに人の頭が付く。 脚の付け根には羽状の小さな突起があり、二本の髭がある小さな被りものを付ける。同様の図像は天王地神塚の北壁の北斗七星下にもあり、「地神」という榜題がある。人頭獣身で両頭の図像は高句麗壁画では2例しか確認できないが、中国では漢代の画像石中にいくつもあり、性格は一様ではないと推測される。また、唐・五代の墓に副葬される俑にも人頭獣(蛇)身のものがある。それらのなかには、陜西省博物館蔵の綏徳出土後漢代画像石のように北方神である玄武と同じ所にあって高句麗の2例と位置が共通するものもある。高句麗壁画における地軸あるいは地神と呼ばれた図像については、それらが北壁中央部の北斗七星の下にあり、これを中 心にいくつかの図像が対称に配置されていることと、魏晋南北朝期の文献資料との対比から、この図像に北斗七星の下にあって地の運動を司る地の軸の存在という観念が反映されていたと推定した(註14)。地軸を墓室の中軸線上、北壁中心に置くのにはきわめて重要な意味があると考える。

北壁下段の六つの図像は、難解な一群である。その榜題は西(左)から、「零陽之像學道不成頭生七□」・「辟毒之像」・「喙遠之像」・「賀鳥之像學道不成背負薬□」・「博位之猗頭生四耳□有得自明在於右」・不明とある。このなかで零陽は、山間に住むかもしかの類の動物である、ウシ科レイョウ(羚羊)属のあるものを指していたと考えられる。画像には榜題のように、現実にはありえない6~7本もの角が見える。末尾の欠字は「角」の意の文字が当たると推定できる。次の辟毒はかなり剥落しているが、残存部から鳥の形をしていたと推定できる。喙遠は下半しか残っていない鳥形の図像である。賀鳥は零陽と同様に榜題に「學道不成」の文句を含み、共通する性格が推測される。背に壺のようなものを背負う。次の博位は、『山海経』に記載されている生き物と推定される。それは南山経のなかの、羊に似た獣で、九つの尾と四つの耳をもち、目は背中にあるとされるものである。図像と異なる点もあるが、音が通じ、全体の形態はかもしかの仲間と推定できる零陽と類似して「羊に似る」という点が近く、四つの耳は図像・榜題の記載と一致する。

次の東壁(図13)には太陽の他に、「青陽之鳥一身両頭」・「飛魚□像」・「陽燧?之鳥履火而行」の榜題をもつ三つの図像がある。二つの頭を有する青陽と同形の図像は後漢代の画像石などにもあるが、それらと同一のものかはわからない。ただ、青陽という言葉自体には東という意味が伴うこともあったらしいため、東壁という図像位置との関連が窺えるかもしれない。また「陽燧」は、報告書では「燧」については充分にわからないとしているが、写真からは素直に「燧」と読める可能性がある。陽燧は太陽から火を採る凹面鏡のような器具で、朝鮮から中国東北地方に分布する多鈕鏡や凹面の銅板をこの一種とする考えもある(註15)。陽燧を器具ではなく生物に擬して表現した例を他に知らないが、この図像が日象の下に置かれ、榜題の「履火」のように足下に渦巻形の火炎があることは、陽燧の性質との関連が窺える。飛魚については、『山海経』では中山経で二ヶ所に登場し、同じ鳥翼魚身では西山経の文鰩魚というものもある。

最後に、以上の図像の種類や配置の特徴についてまとめみたい。

徳興里古墳天井壁画は、狩猟にかかわる図像や太陽・月などを除くと23個の図像で構成されるが、それらは壁画中の役割によって何種類かに分けることができる。1番目は、方位と関わって全体の中心となる図像で、代表は北壁上段中央にある地軸である。また、全体での配置や、他地域の画像資料との比較から南壁の牽牛・織女と天の川からなる図像も同様の性格を帯びていたと推定できる。これに対して東西方向には、東の太陽と西の月を除いて、方位と密接に結び付くような重要な図像が見られない。壁画は南北中心に構成されていたと言うことができる。

2番目の図像は瑞獣や吉祥的な意味を帯びた図像群で、吉利・富貴・千秋・萬歳・天馬・天 雀がこれに当たる。皆、2体一組である。3番目は仙人・玉女であるが、これらは手に蓮華や 旌旗、食物を持っており、好ましい天空の世界の存在として2番目の図像と類似した役割を担っ て描かれたものであろう。

問題は残りの図像で、南壁の猩猩と北壁下段の零陽から東壁の陽燧に至る9個である。これらは、飛魚と呼ばれた有翼の魚や猩猩以外は、高句麗の他の壁画にはほとんど登場しない。ま

た、零陽や賀鳥は榜題に「學道不成」という目出度くない文句を含むなど、2番目や3番目の 図像とは違った性格を帯びたものであったことが類推できる。このうち、東壁の青陽・陽燧は 方位とかかわる図像や、陽にかかわる吉祥的な意味を帯びていたのかもしれないが、他はどの ような意味で壁画に描かれたのであろうか。以下、ひとつの可能性を提示したい。

青陽・陽燧を除く 7 図像のうち、一つは榜題と壁画の一部が剥落しており、名称がわからない。残り 6 図像のうち、猩猩・零陽(レイョウ)・博位・飛魚は『山海経』に登場する。『山海経』の諸品にはその効用を記しているものが少なくないが(註16)、これらは、猩猩→「食すればよく走る」、博位→「佩びれば畏れない」、飛魚→「服すれば雷を畏れず、兵を禦すことができる」(あるいは文鰩魚→「これを食すれば狂をいやし、現れれば天下大いに稔る」)など何かしら役に立つ生き物とされる。レイョウは少なくとも八ヶ所に登場するが、効能や害については特にふれるところがない。しかし、羚羊の角である羚羊角は現代でも漢方で鎮静・解熱剤などとして使われており、『神農本草経』のなかに記載されている薬である(註17)。『神農本草経』は斉・梁朝で活躍した陶弘景(456-536)が後漢代以降伝わっていた多くの異本から定本を作ったとされ、後の本草書の基となった。羚羊はまさしく実効のある動物で、『山海経』で効能ありとされた 3 種の生き物は実在しないものである。

以上は中国側の文献に依ったものであるが、『山海経』にその名が見えなかった残りの2図像でも、辟毒→毒を避けるという呼称、賀鳥→榜題・図像ともに一致する、背負っている薬(壺または袋)など、何か医薬にかかわる効果を窺わせる。4番目の図像群として、効能があると考えられていた生き物の一群を挙げておきたい。

徳興里古墳天井壁画は、少なくとも上記四つのそれぞれ役割が異なる図像をうまく配合して 構成されていたと考えられる。また図像配置で付言すれば、天井全体の図像を一定の向きに回 転して並べている点は、他の四つの古墳では見られない。

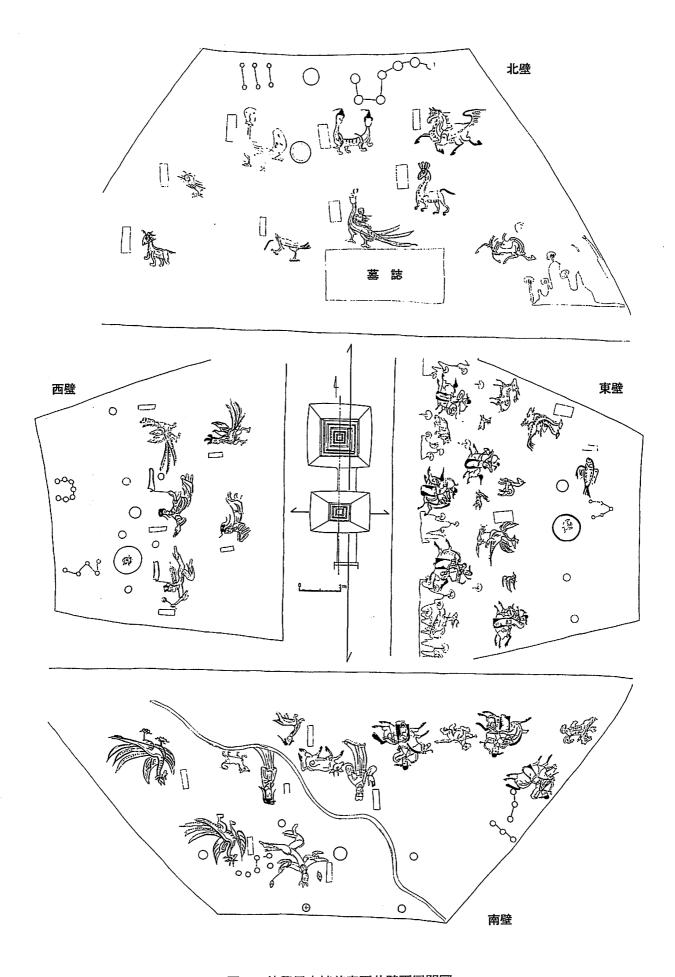
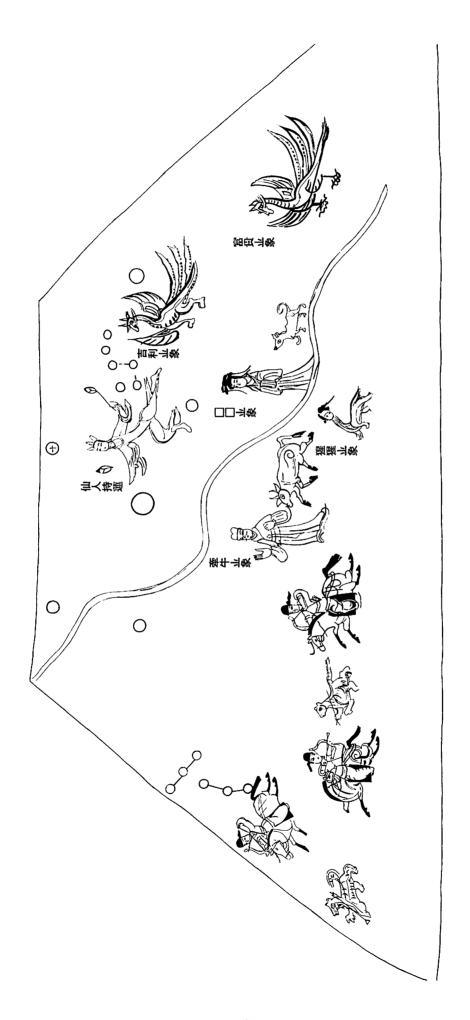


図 8 徳興里古墳前室天井壁画展開図



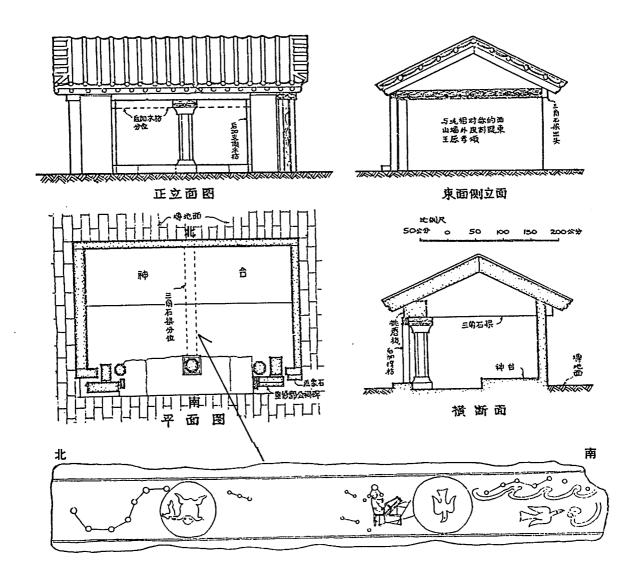


図10 孝堂山祠堂と織女図

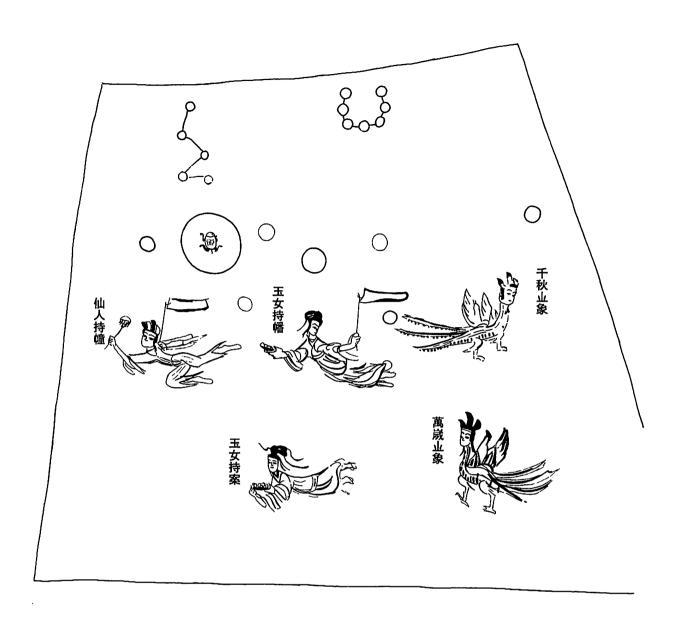
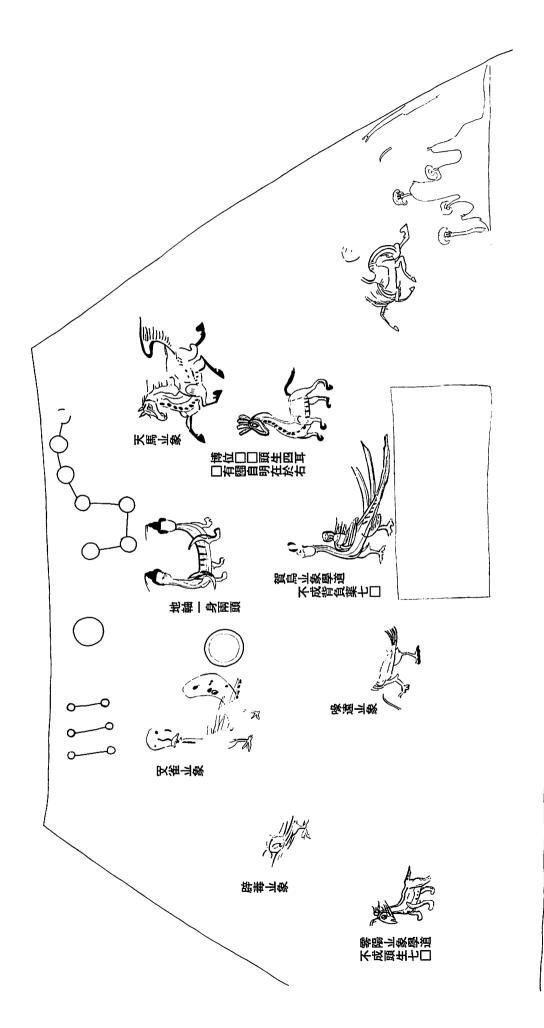


図11 徳興里古墳西壁天井壁画



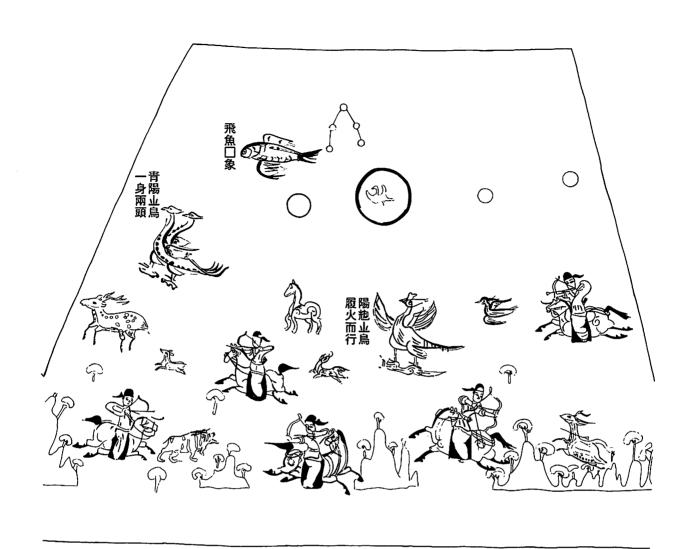


図13 徳興里古墳東壁天井壁画

## (6) 天王地神塚(北朝鮮・平安南道順川市北倉里)

天王地神塚では前室の壁画はほとんど剥落しているが、後室は、亀甲形区画に側面形蓮華を入れた文様で壁を埋め、北壁のみに屋内に座した被葬者夫婦と侍女などの絵が残る。八角形の天井には鬼神・仙人と太陽・月・星がある。天井は上下に二分され、鬼神・仙人は下段の各面にそれぞれ一つずつの計8図像があり、天体は上段に配置される(図14)。下段の図像は、北面を境にして左側(西側)の北西・西・南西・南面の図像が左向き、右側の北東・東・南東面の図像が右向きに描かれており、南北面を除いた図像は南方を向いている。つまり、墓室の南北を軸にしてほぼ対称に並んでいる。このなかの三つの図像には榜題が残っていた。

北面の図像は、徳興里古墳の北壁中央にあった地軸と同じく一身両頭の形で、頭上には文字があり、「地神」と読める(写真11)。地軸とは蛇のように長い身体の巻き具合いに違いがあるが、足の付け根の羽状の突起や、被りものを付けていることは共通する。また重要な点は地軸と同じく北壁に置かれ、上には北斗七星と推定される枡形の星座があり、しかも地神を中心にして他の図像の配列が対称になっていることである。地神の左隣になる北西面には、徳興里古墳の仙人や玉女が持っていた幡を左手に持ち、鳥に乗って飛んでいる人物が描かれ、頭上には「天王」の榜題がある。また右隣の北東面にも同じように鳥に乗って飛んでいる人物がいて、右手に竿を持っているが、先が剥落している(写真12)。これは旌旗の類と思われる。これら2面の図像は、北面を挟んで同様のものが配されている。旌旗を持って鳥に乗る図像は、舞踊塚の仙人にも見える。

次の西面には獣頭鳥身の像があるが、足の部分のみが不鮮明である。これと対面の東壁にも鳥身の図像があって「千秋」の文字が残る。千秋は頭部が不鮮明だが、西面とは形態が異なっている。また鳥身でありながら足は獣のそれであり、この点は徳興里古墳の千秋と同じである。北西面と北東面の対称的な図像配置からすると、西面と東面も同様の関係が想定され、西面の図像は千秋と組になる萬歳と考えられる。徳興里古墳では千秋・萬歳は両者とも人頭の鳥身像として描かれていたが、南北朝期中国における画像磚の図像では、一方が人頭・一方が獣頭の鳥身像で表現するのが一般的であり、その獣の頭は、天王地神塚西壁の獣頭人身像に類似して犬のような細い顔立ちになっているものが多い。また、千秋・萬歳は一枚の画像磚や壁で対面しているが、中国の同時期の古墳では墓室や羨道を挟んで対置するような場合もあり、これは天王地神塚と同じである。

次の南西面には冠毛が長く、尾が長く分岐した鳥(写真13)、対面の南東面には鹿がある。 鹿は舞踊塚や三室塚の壁画にもあり、先述の酒泉丁家閘 5 号墓では天馬と対面する天井部に白 い鹿が描かれていた。ここでは色彩はわからないが、瑞獣の白鹿の類の可能性がある。また、 南西壁の鳥は鳳凰の可能性があろうか。南壁は西に向いた鳥の図像が半ば剥落して残存してい る。この鳥と南西面の鳥を合わせて一対の鳳と凰、または南壁の鳥は朱雀などの可能性も想定 されるが、推測の域を出ない。

天王地神塚の天井壁画を徳興里古墳と比較してみると、北壁の地軸を中心とした対称的な図像配置は、徳興里古墳の地軸と牽牛・織女を柱とした南北中心の図像配置と共通する点がある。図像には徳興里古墳と同じものが見られ、方位に関わって図像の中心になるもの、祥瑞や吉祥的な意味を有するもの、仙人などの3種の図像で、より少数に選択された構成となっている。

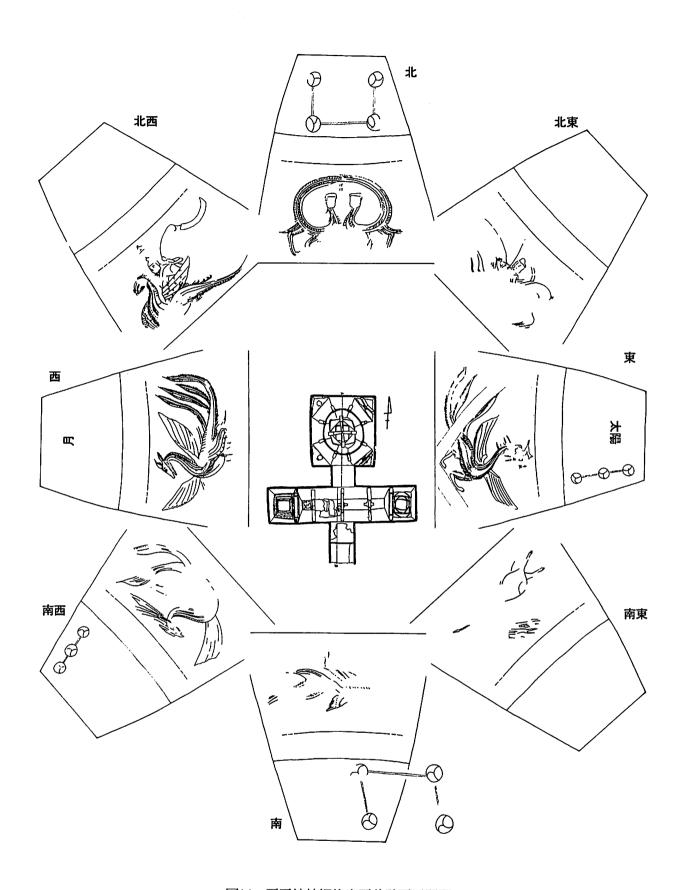


図14 天王地神塚後室天井壁画展開図



写真11 天王地神塚前室天井北面の地神



写真12 天王地神塚前室天井北東面の図像



写真13 天王地神塚前室天井南西面の図像

## (7) 安岳1号墳(北朝鮮・黄海南道安岳郡大楸里)

安岳1号墳は羨道と玄室から成る単室墓で、壁の壁画は上半しか残存していないが、北に殿閣図、南から東は出行図、西は上に狩猟図、中段に女性たちの群像と樹木がある。天井は3段の平行持送りに2段の三角持送りを重ねており、平行持送り2段目に8体、三角持送り1段目に4体の鬼神類があり、他に蓮華文・三角形火炎文・星・太陽・月などがある。

天井の鬼神類は、平行持送り2段目では各面で中央の三角形火炎文を挟んで2体が向き合い、三角持送り1段目では各面に1体ずつ同方向を向いて配置される(図15)。まず下段の図像からみると、東壁には南に人頭獣形、北に頭部が剥落した鳥の図像がある。この人頭獣形の図像は、徳興里古墳では南壁の下部にあった猩猩に当たる可能性が考えられる。高句麗では人頭獣形像は少なく、頭部や尻尾などが類似する。一方、北にある鳥の図像は他の鳥形の鬼神類と違いがある。それは尾の形態と文様で、高句麗古墳の天井壁画の鳥形の図像では種別を越えて尾は2~4に細く分かれているのが一般的で、これは安岳1号墳の他の図像においても同じである。尾が分岐せず、幅広く描かれている例は珍しく、また4個の円形の文様がある。この文様は孔雀の眼状斑のように見え、尾の特徴は徳興里古墳の北壁上段西にあった天雀と共通しており、同様のものである可能性がある。

次に対面する西壁では南に有翼の獣がいて、北の図像は剥落している。有翼の獣は、翼の有無に違いがあるが、徳興里古墳で天雀と対に配置されていた天馬と同じものであろう。南壁では西に有翼の獣、東に有翼の魚がある。有翼獣は丸みを帯びた頭部などがやや異なるが、基本的には西壁の天馬としたものとかわらない。また有翼の魚は、徳興里古墳では東壁の飛魚があった。北壁には、鶏冠があって尾が3分し、羽を広げた同形の鳥が向き合っている。このような鶏冠を有する鳥が対面した図像は、舞踊塚の後室天井部南西壁や、集安市長川墓区長川1号墳の前室天井部西壁などにあり、これらでは青龍・白虎などの四神とともに描かれていて朱雀であることは間違いない。安岳1号墳の場合は北壁に位置するが、朱雀が方向を違えて不完全に取り入れられていると推定できる。それは、上記のような他の朱雀との図像上の類似とともに、太陽と月の位置が他の古墳と逆転して、東の持送り下面に蟾蜍のいる月が、西の同じところに三足鳥が剥落したと推定できる円形があり、東西南北の方向とは一致しないが、朱雀・太陽・月の相互の位置関係には矛盾がないためである。

次に三角持送り1段目の四つの図像では、まず北西には南を向いた獣頭鳥身像があり、対面する南東壁には頭部が剥落し、羽を広げた鳥身の図像がある。北西の獣頭鳥身像は天王地神塚で西壁にあって萬歳と推定した図像とよく似ており、南北朝期の千秋・萬歳像のうちの獣頭の方、萬歳の図像で、対面する南東壁の鳥身像は千秋と考えられる。おそらく剥落している頭部は、被りものを付けた人の頭であったと推測される。残る北東には北を向いた人物がいて、鳥の図像と同じく3分した尾羽が付く。羽の有無は不明だが、下半身は鳥の形態のようである。頭には被りものを付けており、後述の舞踊塚に関連のありそうな図像がある。また対面の南西にも尾羽の長い鳥がある。

安岳1号墳は、徳興里古墳や天王地神塚のように南北を中心とした図像配置とはなっていない。一方、図像の種類には似た物があって、徳興里古墳と同種のものからより少数に絞られて構成されていると考えられる。ここでは朱雀のみの不完全な四神を壁画に取り入れている点が注目される。

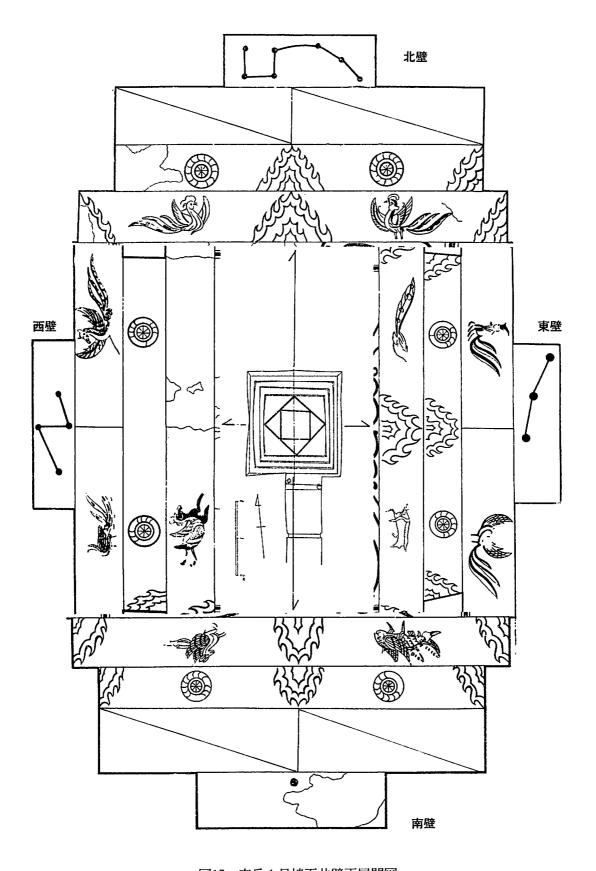


図15 安岳1号墳天井壁画展開図

## (8)舞踊塚(中国·吉林省集安市禹山墓区)

舞踊塚の壁画は、まず前室に一対の鞍・人物・家屋などがあり、後室には北東壁(奥)に主人が客を迎えている場面と従者たち、北西壁(左)に狩猟と樹木・牛車、南東壁(右)に厨房・舞踊の図と主人と思われる騎乗の人物、通路を挟んだ南西壁(手前)にそれぞれ1本の樹木がある。後室天井は下部3段が平行持送り、上部4段が小さな三角持送りを使用した八角形になっており、各種の鬼神類・仙人などの人物・太陽・月・星が描かれ、隙間を埋めて側面形蓮華文がある。ここで分析するのは後室天井の図像群である(図16)。

後室天井壁画では、高さによって図像の性格が異なっている。まず下部の平行持送りの壁画では、最下段は壁と天井部の壁画を区分するように梁が描かれ、梁上には三角形火炎文がある。その上の1~2段分を使って四神・人物像などがある。北東壁には2人の上半身裸の男子が向かい合う角抵の場面があり、南西壁には鶏冠があって尾が垂れた2羽の鳥が向き合っている。2羽の鳥は、北西壁の白虎、南東壁の青龍と一組になる朱雀である。舞踊塚の場合、玄武はなく、そこに代わってあるのが角抵図となる。北西壁の白虎と、南東壁の青龍の南側にはそれぞれに樹木を挟んで向かい合った一組の人物がある。北西壁の2人は瑟を弾いているところで、左が男性、右が女性である。男性は手足とも衣服の裾が二つに分かれている点、長耳であること、被りものなどが、天井上部を飛翔している仙人とかわらない。一方、南東壁の2人は牀に座して、一方は筆をとって短冊状のものに何かを書き付けているところである。こちらは衣服の裾は割れておらず、普通の耳で、被りものの形態も異なっており、天井上部の仙人とは異なっている点がある。

天井下部の平行持送り部の図像は、四神と仙人のような非現実や天上の存在と、角抵を取る人物や牀に座した人物のように現世の存在と姿形や行為に違いが見い出せないものの2種が混交している。持送り4段目以上の天上の世界と壁部分の現世的な各種生活場面との境界的な部位と位置付けることができる。

これに対して天井上部、持送り4段目以上は鬼神類・鳥・仙人の19個の図像で占められ、完全に天上の世界を表わすと考えられる。各図像の向きからすると、下部の平行持送り部と同じく、ほぼ墓室の軸(北東から南西)に対して対称的な図像配列になっている。奥壁に当たる北東から図像の方向に従ってみていくと、左向きに並ぶ図像の出発点は北東壁4段目の麒麟である。これは先の丸い1本の角、馬と同じ蹄、牛のような尻尾などを有し、前足の付け根部分には小さな羽があって天上を疾駆している。次の北壁4段目の被りものを付けた人頭鳥身の像は、これまでみた三つの古墳の例に従えば千秋・萬歳の一方ということになるが、隣や対面に組み合う人頭鳥身や獣頭鳥身の図像がない。舞踊塚のこの図像などを、仙人となった伝説の王子喬と推定した説があるが、林巳奈夫は、仙人が人間と鳥の間の姿で表わされる例はないと否定している(註18)。安岳1号墳の三角持送りにある上半身が人で下半身に鳥の尾羽を有する図像と関連があるかもしれない。また北壁6段目には逆(右)向きに飛んでいる仙人がある。この仙人は角笛を吹いており、楽器を奏しているとみられる仙人は他に3体ある。平行持送りの仙人が弾く瑟と和しているのであろう。この仙人の衣服にはU字形の弧状にたなびいている部分が付き、同じものが舞踊塚の仙人ではあと2例に見られる。これは本来は仙人の衣服である羽衣に備わるものではなく、仏教図像である飛天がまとう天衣に特徴的な表現である(註19)。

次の北西壁は4段目に蟾蜍の入った月、5段目に天馬がある。天馬の形態の特徴は徳興里古 墳北壁のそれとかわらない。ただ、舞踊塚では前足の付け根に小さな羽が付いている点が異な る。また西壁は4段目に疾駆する鹿、5段目には身体を横向きにし、3本の蓮を握って飛翔している仙人がある。鹿は、天馬や麒麟と同様の風になびくたてがみ・背や足の付け根の毛・羽などがあり、天上の存在であることを示す。天井壁画の鹿は他に天王地神塚や三室塚にあり、蓮を持って飛んでいる仙人は徳興里古墳の南壁にあった。また6段目には尾羽が丸く、冠毛が長い鳥がある。

以上と対称的な右向きの図像群では、まず北東壁の麒麟の一段上、持送り5段目には首を曲げて右方向へ飛んでいる鳥がある。ここには北斗七星があり、その上の持送り7段目には両手に楕円形状のものを持っている仙人がいる。これも打ち鳴らしたりする楽器の一種の可能性がある。その前の東壁の図像は4段目に角笛を吹いて飛んでいる仙人、6・7段目に連華をくわえた鳥がいる。南東壁には4段目に三足鳥がいる太陽と鳥の図像があり、後者は鶏冠があって尾が分岐し、口には珠をくわえる。似た形態の鳥は高句麗では四神図の朱雀としても描かれるが、北東壁にある麒麟と同じく瑞獣である鳳凰であろう。また5段目にある、身体を横向きにして飛んでいる仙人では、北壁の仙人と同じく天衣のようにU字形になびいた部分が二つ付く。その上の7段目には魚を啄む鳥がある。さらに南壁の4段目には、右手に何かを持って鳥に乗って飛ぶ仙人があり、2羽の鳥を御している。天王地神塚にある、旌旗の類を持って鳥に駕している人物との関連が考えられる図像である。その上の持送り5・6段目にある、蓮華をくわえたり手に持った鳥や仙人は、他の部位の図像で同じものがあった。最後に南西壁には4段目と7段目に飛翔している仙人がある。はっきりと読み取れないが、下段の仙人は両手にそれぞれ楕円形の器物を持っており、楽器の可能性がある。また、上段の仙人の衣服には天衣のようなU字形が二つ付いている。

舞踊塚の図像の配置や種類をまとめてみると、まず平面的には墓室の軸(北東から南西)を中心に対称に配置されており、天王地神塚と類似する。図像の種類には、方位に関わるもの、祥瑞や吉祥的な意味を有するもの、仙人などの3種の図像があり、とくに蓮華を持ったり、奏楽している仙人や鳥の数が多い。

第2に、天井の高さにしたがって、四神と仙人・人間の混交→祥瑞・吉祥的な図像→仙人・ 鳥とおおまかに区分されるという配置の原則がうかがえる。また、四神は玄武を欠いた不完全 なもので、仙人の図像に仏教的な飛天の衣服の特徴が一部に付加している点が注目される。

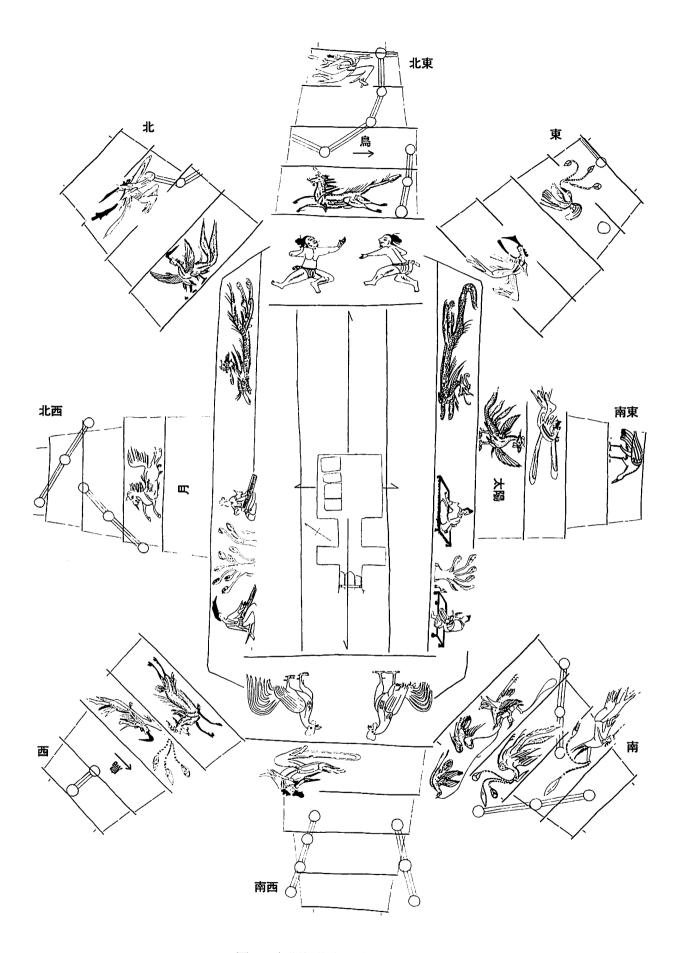


図16 舞踊塚後室天井壁画展開図

## (9)三室塚(吉林省集安市禹山下墓区)

三室塚の三つの石室は、手前から順に1・2・3室と呼ばれる。まず壁の壁画は、第1室が東壁(奥壁)に建物内にいる主人公らの図、南壁に狩猟(下)と行列(上)、北壁に城郭と戦闘の場面、羨道とつながる西壁両側に武官と文官の門番が描かれている。第2・3室では各壁に1人ずつ、壁と天井部の境の梁を支える力士や門番がいる。天井は、4~6段の平行持送りの上に2段の三角持送りを重ねる。第1室の天井壁画はほとんど剥落しているが、第2・3室の天井には各種の鬼神類や天人・仙人が蓮華文や巻雲文とともに描かれている。ここでは、より多くの図像が細部までわかる第2室の天井壁画をみてみたい(図17)。

まず天井部最下段は2体一組になった四神図である。東壁(石室全体から見て奥側)に玄武、南側に青龍、北側に白虎、西側(手前側)に朱雀がある。玄武と朱雀では個々が向い合い、青龍と白虎は朱雀の方を向く。このような四神図は第1・3室にもあり、描かれた部位も同じである。舞踊塚との比較では、奥壁の角抵図の2人の力士が対の玄武に代わり、青龍・白虎の眼前にあった奏瑟の仙人と座牀の人物がそれぞれもう1体の青龍・白虎に代われば、同じ組み合せの四神図が同じ部位にできることになる。次に四神図の上の平行持送り2段目は側面形蓮華文、3段目(南壁は4段目も)は巻雲文がある。これより上は鬼神類・仙人・飛天などの図像となっており、平行持送り最上段の各面に2、三角持送り1段目の各面に2、同2段目の各面に1の計20の図像があり、天井石には太陽・月と北斗七星・南斗六星がある。図像は正面向きの蓮華化生図を除いて、皆、左方向を向いて回転するように続いている。

平行持送り最上段では、まず北には左(西)に麒麟、右(東)に人頭鳥身像がある。麒麟は頭部に先端の丸い角があり、前足の付け根に小さな羽が付く。人頭鳥身像の対面の南壁東側には獣頭鳥身像があって、配置原理や細部の特徴は天王地神塚や安岳1号墳の千秋・萬歳と推定した図像と同じことから、これらも同じ組み合せと考えられる。その前の西には左に冠毛の長い鳥、右に鹿がいる。鹿は鹿子斑があり、小さなたてがみが付いている。同種の鹿は先述した天王地神塚や三室塚にもあり、瑞獣としての鹿であろう。南には左に千秋・萬歳の一方の獣頭鳥身像、右に鶏冠があって尾羽の長い鳥がいる。後者の鳥は舞踊塚の南東壁にあった朱雀形のものと同種である。西と南の二羽の鳥は確実な比定はできないが、どちらかが鳳凰、あるいは一方が鳳で、一方が凰とも想像される。東は左に耳が立った頭をもつ鳥があり、右の図像は剥落してよくわからない。これと類似した鳥は、時期は降るが、南浦市江西区域の江西大墓の西壁三角持送り上段にある。第3室の天井壁画に登場している図像の種類と比較すると、剥落している部分には何らかの鳥の図像や天馬などがこようか。

さらに上の2段の三角持送り部分は、飛天や蓮華化生図を主にする。1段目持送りの南西では左に立位の人物、右に蓮華化生図がある。前者は右手に鉾、左手に旌旗を持っている。頭は獣のようにも見えるが、髭があることや立った耳を仙人特有の長耳とみると、鬼神ではなく仙人と考えられ、裾が二つに割れた衣服の特徴も仙人のものである。南東の持送りには左に角笛を吹く男、右に琵琶を弾く女が飛んでいる。左の図像は一見すると舞踊塚の角笛を吹いている仙人に似るが、髪は高く結い上げて被りものは付けず、上半身は裸で紐のような天衣をまとい、衣服の裾は二つに割れておらず、長耳でもない。これまで各古墳でみた仙人の特徴はなく、飛翔している飛天を表している。また右の図像も紐のようなものがなびく天衣をまとい、円形の光背がある。典型的な飛天である。次の北東の持送りには左右に蓮華化生図があり、北西の持送りの2図像は詳しい報告がなく、不明である。2段目の持送りには各面に1体ずつ、同じ姿

態で飛翔している飛天があると報告されている。おそらく南東の飛天のように、種々の楽器を 奏していると想定される。

三室塚第2室の天井壁画は、図像の種類では、方位に関わる四神、祥瑞や吉祥的な意味を有するもの、飛天や蓮華化生図と仙人の3種のものがある。ここでは、仙人の図像が1体しか確認できず、主流は飛天になっている。また、天井の高さにしたがった図像構成は舞踊塚より整理されており、①四神(平行持送り最下段)→②瑞獣や吉祥的な生き物(平行持送り最上段)→③飛天や蓮華化生・仙人(2段の三角持送り)と高くなり、①と②は蓮華文と巻雲文の2段(西壁3段)の文様帯で区分する。

第3室の壁画を第2室と比較すると、基本的な図像配置は似ているが、大きな違いは天井上部の三角持送りにあった飛天や蓮華化生・仙人の図像がひとつもないことである。図像の種類は四神と、蓮華文・巻雲文の文様帯を挟んで上部にある瑞獣・吉祥的な生き物に限られる。同じ図像の繰り返しもあることから、第2室より簡略化されたものと理解できる。

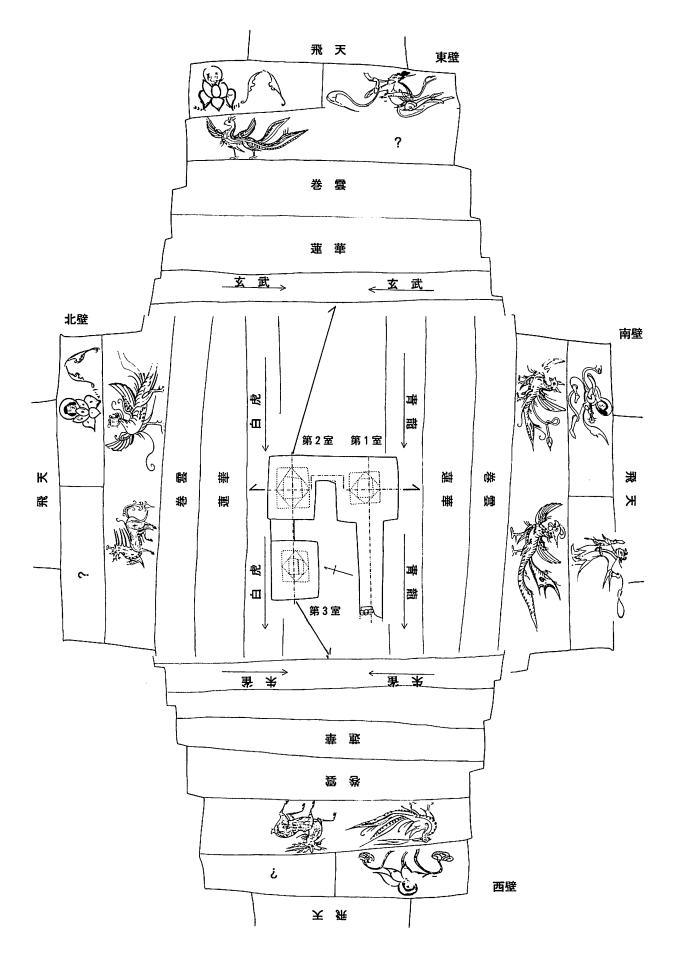


図17 三室塚第2室天井壁画展開図

#### 註

- (1) 韓国国立中央博物館編『高句麗古墳壁画 ―国立中央博物館所蔵模写図―』、ソウル、2006年
- (2) 南秀雄「高句麗古墳壁画の図像構成 一天井壁画を中心に一」『朝鮮文化研究』第2号、東京大学大学院人文 社会系研究科・文学部朝鮮文化研究室紀要、東京、1995年
- (3) 林聖望「中国北朝期の天文図試論 一元乂墓を中心として一」『京都大学文学部美学美術史学研究室研究紀要』 20号、京都、1999年
- (4)朝鮮総督府編『朝鮮古蹟図譜』第2冊、東京、1915年
- (5) 敦煌文物研究所編『中国石窟 敦煌莫高窟』1、平凡社、東京、1980年
- (6) 甘粛省博物館「酒泉、嘉峪関晋墓的発掘」『文物』1979-6、北京 甘粛省文物考古研究所編『酒泉十六国墓壁画』、北京、1989年
- (7)羅哲文「孝堂山郭氏墓石祠」『文物』1961-4・5、北京
- (8) 小南一郎『西王母と七夕伝承』平凡社、東京、1991年、18~45頁
- (9) 夏耐「洛陽西漢壁画墓中的星象図」 『考古』 1965-2、北京
- (10) 雲南省文物工作隊「雲南省昭通後海子東晋壁画墓清理簡報」『文物』1963-12、北京
- (11) 王去非「隋墓出土的"千秋万歳"及其他」『考古』1979-3、北京 王愷「"人面鳥"考」『考古与文物』1985-6、西安 林巳奈夫「洛陽ト千秋墓壁画に対する注釈」『漢代の神神』臨川書店、京都、1989年
- (12) 河南省文物工作隊『鄧県彩色画像磚墓』、北京、1958年
- (13) 伊藤秋男「慶州天馬塚出土の障泥にみられる天馬図と唐草文」『考古学叢考 斉藤忠先生頌寿記念論文集』 上巻、吉川弘文館、東京、1988年
- (14) 南秀雄「高句麗壁画の地軸像」『古文化談叢』30、北九州市、1993年
- (15) 榧本杜人「陽燧と多鈕細文鏡」『考古学雑誌』第55巻第1号、東京、1969年 駒井和愛「陽燧及び方諸の形態」『中国古鏡の研究』岩波書店、東京、1953年、164~187頁 小南一郎「鏡をめぐる伝承―中国の場合―」、森浩―編『鏡』社会思想社、東京、1978年
- (16) 医薬との関係という点では、中尾万三「山海経を読む(1)~(9)」(『本草』11~20、1933~1934年) などを参考にした。
- (17) 岡西為人他考訂『経史證類大観本草』(国立中国医薬研究所出版)による。羚羊(レイョウ)は『山海経』のなかでの登場回数は多いにかかわらず、その効用についてはふれていないが、それは「ポピュラーな薬草類については、産出する山名のもとに、それぞれの名を記述するにとどめ、形状など属性も、効用についてもなんら説明を加えていない。いっぽう、やや特殊と思われる植物については、形状の特徴と薬効について解説を施している。」(伊藤清司『中国の神猷・悪鬼たち 山海経の世界』、東方書店、東京、1986年、129頁)ということと同じ理由かもしれない。
- (18) 林註(11) に同じ
- (19) 仙人と天人の形態などの違いは主に以下の文献を参考にした。 吉村怜「仙人の図形を論ず」『仏教美術』184号、東京、1989年 同 「天人の語義と中国の早期天人像」『仏教美術』193号、東京、1990年 林温『飛天と仙人』日本の美術330号、至文堂、東京 1993年

#### 図・写真・表

- 図3 龕神塚前室西龕奥壁壁画 図1に同じ
- 図5 龕神塚前室東壁壁画 図1に同じ
- 図6 稲神塚前室北壁壁画 図1に同じ
- 図 7 双楹塚後室北壁壁画 東京大学工学部建築科所蔵模写の南撮影資料より作成
- 図 8 徳興里古墳前室天井壁画展開図 朱栄憲解説『高句麗古墳壁画』(朝鮮画報社)・朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会『朝鮮遺跡遺物図鑑』 4 高句麗編 (3) より作成
- 図9 徳興里古墳南壁天井壁画 図8に同じ
- 図10 孝堂山祠堂と織女図 羅哲文「孝堂山郭氏墓石祠」『文物』1961-4・5
- 図11 徳興里古墳西壁天井壁画 図8に同じ
- 図12 徳興里古墳北壁天井壁画 図8に同じ
- 図13 徳興里古墳東壁天井壁画 図8に同じ
- 図14 天王地神塚後室天井壁画展開図 『高句麗時代之遺跡』図版下冊より作成
- 図15 安岳1号墳天井壁画展開図 科学院考古学及び民俗学研究所『安岳第1号墳及び第2号墳発掘報告』
- 図16 舞踊塚後室天井壁画展開図 池内宏・梅原末治『通溝 巻下』・安輝濬他『集安高句麗古墳壁画』より作成
- 図17 三室塚第2室天井壁画展開図 図16に同じ
- 写真2 稲神塚前室西壁天井 写真1に同じ
- 写真3 稲神塚前室東稲奥壁 写真1に同じ
- 写真 4 船神塚前室北壁天井 写真1に同じ
- 写真 5 双楹塚前室天井持送りの鳥(上より西・東・南・北の持送りの1羽分のみの部分) 写真1に同じ
- 写真 6 狩猟塚北壁の墓主像 写真 1 に同じ
- 写真7 狩猟塚東壁の騎馬人物 写真1に同じ
- 写真8 狩猟塚西壁にある狩猟の騎馬人物 写真1に同じ
- 写真9 鎧馬塚東持送りの鎧馬 写真1に同じ
- 写真10 鎧馬塚三角持送りの飛天 写真1に同じ
- 写真11 天王地神塚前室天井北面の地神 写真1に同じ
- 写真12 天王地神塚前室天井北東面の図像 写真1に同じ
- 写真13 天王地神塚前室天井南西面の図像 写真1に同じ
- 表 1 徳興里古墳壁画配置一覧表 社会科学院・朝鮮画報社『徳興里高句麗壁画古墳』(講談社)

## 図像構成からみた高句麗前期の壁画古墳の特性と被葬者の出自の研究

課題番号:17520532

平成17年度~平成19年度科学研究費補助金 基盤研究(C)研究成果報告書

研究代表者 南 秀雄 (財団法人大阪市文化財協会文化財研究部)

2007年6月

印刷・製本:タカダ印刷株式会社